「かながわ人づくりコラボ2023」の実施結果の概要

１　開催の趣旨

かながわ教育ビジョンについて県民の方々と共感と共有を図り、様々な主体との協働・連携による人づくりをより一層推進するとともに、より実効性のある教育施策の実現に資するため、かながわ教育ビジョン第６章に基づき、かながわ教育月間に合わせて開催するもの。

２　開催の状況

(1) **開催形態**　　会場開催とオンライン配信を併用して開催
(2) **日　時**　　令和５年10月28日（土）14：00～16：00
(3) **場　所**　　県立総合教育センター　講堂
　　横浜市役所atrium（サテライト会場（横浜 STEAM EXPO 2023））
(4) **テーマ**　　え!?今の高校はこんなことやってるの!?　～生徒・教師のチャレンジ～
(5) **参加者**　　【会場】111名　【オンライン】181名

３　開催の内容

(1) 開会（神奈川県教育委員会　教育長　花田忠雄）

開会の挨拶として、「かながわ教育ビジョン」の理念に基づく取組、県民との教育論議の機会である本コラボの趣旨とテーマ設定の視点について話があった。

(2) 実践紹介

前半は、横浜市役所atriumで開催されている「横浜 STEAM EXPO 2023」と中継を繋ぎ、横須賀工業高校でお笑いコンビを組んでいる「いまつっち」のふたりから、現地の様子についてレポートがなされた。工業や農業、水産など様々な専門高校の企画や展示の紹介があった。

後半は、５つの県立高校の特徴的な取組を紹介する動画の上映を行った。

○　上映動画

学校名	動画内容
神奈川工業高等学校	「かながわ P-TECH」～高校－県立産業技術短期大学校－企業の連携で展開するＩＴ人材育成のための新しい教育モデル～の取組
神奈川総合高等学校	KAAT（神奈川芸術劇場）との連携による舞台芸術科の取組
横浜翠嵐高等学校	横浜国立大学との連携による国際交流活動の取組
厚木北高等学校	神奈川工科大学との連携によるスポーツ科学科の取組
逗子葉山高等学校	幅広い地域資源を活用した教育活動の取組

(3) 教育論議

「学校の実践例から考えるこれからの教育のあり方」をテーマに、パネリストによる学校の実践例の紹介を踏まえ、課題解決に向けた具体的な方策について、教育論議が行われた。

◇コーディネーター：常陸　佐矢佳 氏（神奈川県教育委員会　委員）

◇パネリスト：折笠　初雄 氏（学校法人岩谷学園　理事・本部長、桐蔭横浜大学 客員教授）
川上　悟史 氏（県立神奈川工業高等学校　総括教諭）
久保田　佑 氏（県立神奈川総合高等学校　教諭）
會田　勉 氏（県立逗子葉山高等学校　校長）

○　県立高校における新たな取組の紹介

（川上 氏）

- 神奈川工業高校では、Society 5.0の時代に対応するエンジニアを育てるために、神工STEAM教育に取り組んでいる。
- 令和４年度に県教育委員会からSTEAM教育研究推進校に指定された。
- そのSTEAM教育の中の１つの取り組みとして、日本IBMと連携した「かながわP-TECH」に取り組んでいる。

（久保田 氏）

- 神奈川総合高校では、令和３年４月に専門学科の舞台芸術科が設置された。
- 舞台芸術科では、舞台芸術の技術を学ぶだけではなく、舞台芸術を幅広く学ぶことを通じて、人間関係を作る力や問題を解決する力を育てている。
- また、神奈川芸術劇場（KAAT）や青少年センター、大学など、外部機関との連携も大切にしている。

（會田 氏）

- 逗子葉山高校は、逗子高校と逗葉高校の再編・統合で今年の４月に開校した普通科の新しい学校である。
- 昨年度、100年の歴史に幕を閉じた逗子高校が長年かけて育て上げてきた「地域ワークショップ」の取組を、今、逗子葉山高校が受け継いで行っている。

○　取組における生徒の様子について

（川上 氏）

・　実際のITエンジニアの方とディスカッションをすることによって、生徒がIT業界を身近に感じることができる。

・　プログラムがどういう技術に使われているかは普段の授業でも話しているが、ITエンジニアの方から実際の例を踏まえて言ってもらうと、効果がまるっきり違う。

・　実際にITエンジニアとして働いている方の話を聞くことで、普段学んでいることのゴールが見え、生徒の意欲が増していくのを感じる。

（久保田 氏）

・　外部の劇場での学びを通して、多くの方の見識に触れることで、多角的な視野を育てることを目的としている。

・　１年次に基礎を学び、２年次にKAATなどの劇場で学ぶことで、学校の中では気づき得ない様々なことを実感として学ぶことができる。

・　外部の方から、その職にどう就いたかといった話を聞くことで、今の自分とどう繋がっているのか考えることになり、そういったことも本人たちの気づきになっていく。

（會田 氏）

・　まちづくりの講座を受けた生徒が建築学科を目指したり、火星について学ぶ講座を受けた生徒がロケット工学の勉強ができる大学を目指したり、ということが起きている。

・　このワークショップの取組は、今まで知らなかった世界に触れることができるすばらしい機会だと考えている。

（折笠 氏）

・　国の学習指導要領の最大のポイントである「社会に開かれた教育課程」に３校ともしっかりと取り組んでいる。

・　そういった取組をすることで、生徒のどういうところが変化してきたか、率直に感じる部分を教えてほしい。

（川上 氏）

・　「社会に開かれた教育課程」に取り組むことで、今の勉強が何に繋がっているのか生徒が実感し、意欲を高めることができる。

・　そういった“マインドセット”を醸成するということはこの３校に共通しており、重要なテーマなのかもしれないと感じる。

（久保田 氏）

・　実際に自分の憧れの職業に就いた人が、どんな経緯でそうなっていて、どんな苦労があったかを知ることで、社会や自分の将来との繋がり方を自分事として捉えるようになったことを、生徒の変化として感じている。

（會田 氏）

・　ワークショップで様々な場に生徒が出ていくことで、人前で話をすることなどが遠慮なくできるようになり、積極的になったと感じている。

○　外部協力者について

（川上 氏）

・　企業の方に、「教えるのは先生がプロなので、私たちは先生が教えやすいようにマインドセットを育てるお手伝いをします」と言われ、衝撃を受けた。

・　私達の授業がやりやすくなるように、外部と連携して、やる気の醸成、マインドセットの醸成をしてもらっている。

（久保田 氏）

・　KAATのスタッフの方が、本当に教育的に、親しみを持って生徒に触れて、授業の内容なども組み立ててくださっているのが印象的である。

・　KAATに見学に行くことを通じて、公共の劇場が社会の中でどのような役割を担っているかということにも意識が向くようになる。

（會田 氏）

・　このワークショップは逗子高校が長い間行ってきたものだが、逗子高校が閉校すると決まった時に、ワークショップの講師の方々は大変ショックを受けたというふうに言っていた。

・　この逗子高校の取組を、２年前に逗葉高校で、現在は逗子葉山高校で引き継いだが、講師の方々は本当にうれしいと言っていた。

・　生徒を育てることはもちろん学校の役割だが、そこに協力することを楽しみにしたり、大事にしてくださる方がたくさんいることは、ものすごい力であり、学校にとって大きな支えになっている。

（折笠 氏）

・　おそらくすべての高校で様々な取組を行っていると思うが、外部や地域に開かれたといった取組をするときには様々な課題があると思う。

・　今回のようなうまくいっている事例における課題を共有し、他の高校でも参考にすれば、より良い教育になると思う。何か課題があればお聞きしたい。

（川上 氏）

・　学校単独では課題解決型人間をそう簡単には育てられない時代になっているが、そもそも地域の課題というものを教員が知らなかったりするため、外部とつながることそのものが課題なのではと思う。

（久保田 氏）

・　本校の場合は、舞台芸術科が出来たのがコロナ禍の真っただ中だったため、KAATに伺うことひとつをとっても、劇場の方に移してしまったら劇場で行われている公演ごと中止になってしまうなど、大変な責任があった。

・　学校内であれば大きな問題にならなくて済むことにも細心の注意を払わなくてはいけないということが難しさだったと感じる。

（會田 氏）

・　地域ワークショップでは、講師となっていただく人を集めていくことが難しい。

・　また、講師の方がどのような授業をするのか中々わからないといったこともあるが、実際には、生徒への一方通行な授業ではなく、双方向で、最先端な授業をするため、私たちが学ばせていただく場面も多い。

（常陸 氏）

・　企業や地域で活躍する方々との接点が生まれることで、こうなりたい、やっぱりこういう仕事がしたいというやる気の刺激とともに、この年齢でロールモデルが見つかるといったような可能性が生まれることも、学びの意欲を高める点で素晴らしい取組だと感じる。

○　今後の展望について

（川上 氏）

・　外部とどうつながるかといったところが課題となっていると先ほど話したが、神奈川県内の全県立高校がこういった取組ができるように、本校でパッケージング化していきたいと考えている。

・　かながわP-TECHは電気科で行っているが、建設科の方でも「次世代建築リーダー育成コンソーシアム」という名前で、同様の取組を行っている。

・　かながわP-TECHから得た外部との連携の仕方を本校で試しているため、このコンソーシアムができた上では、全部の県立高校にそのノウハウを提供したいと考えている。

（久保田 氏）

・　今回はプロの劇場とつながるということを紹介させていただいたが、今後はもっと他の繋がり方というものを検討している。

・　将来のことを生徒に聞いていくと、例えば教育や福祉、国際交流など、そういった場に演劇を活かしていきたいという応用演劇的な視点を持っている生徒が多いということがわかってきたため、演劇や舞台芸術を活用していくという視点に立ったものを充実させていきたい。

（會田 氏）

・　文部科学省が話題にしている普通科の改革の中で、地域社会に関する学科がこれから出来上がっていくということがあり、そのことへの繋がりは意識をしている。

・　ただ、現在の本校のワークショップは、地域の方のそれぞれの専門分野を学ぶところに留まっているため、地域社会に関する学びというところで、もう少し広がりが持てればと思っている。

・　その他、働き方改革という視点も必要となっているため、時に生徒が主体的に関わっていくような、持続可能で自立した地域連携を作っていく必要があると考えている。

（折笠 氏）

・　自分のところだけではなくて、周りにも広げたいというのは素晴らしい考え方だと思う。

・　学習指導要領では、主体的で対話的で深い学びと言われているが、こういった授業を通して生徒にどんな力を持たせたいかなど、各校で考えていることがあれば教えていただきたい。

（川上 氏）

・　学習指導要領にも出ている、課題解決型人材を育成するというところに尽きると思う。

・　今まで行ってきた通常の学習に加え、課題解決力を身につけることを目標にしている。

（久保田 氏）

・　舞台芸術科としては、生きる力を身につけるというのがめざすところかと思う。

・　作品を作っていくうえで、違う人たちがひとつの目標に向かってどういうふうに協力していくかということを、多感な高校生の時期にやってみることで、周りとのつき合い方や自分自身とのつき合い方を学び、生きる力になるのではないかと考えている。

（會田 氏）

・　校歌を作るワークショップを有志の生徒20人ほどで行い、その中で多くのあつれきが生まれたが、ワークショップの講師の方はそういった意見が合わない場面にもとことん付き合ってくれた。

・　そのような場面にもちろん教員も関わらなくてはいけないが、学校外の方と一緒に進めていくというのは、実践的な世の中を生きていくための術と思っており、そういった場面を作れるのが地域連携の良いところのひとつだと思う。

○　参加者との意見交換

会場及びオンラインの参加者から、意見や質問を募集した。

【質問 ①】

「行ける高校」の中から進路を考える中学生に、各校の特色を伝えることが大切だと感じる。中学生が「偏差値」から「特色」にフォーカスをしていく上で、普段からどのように情報を集めればよいか。

（川上 氏）

・　ひとつはホームページを見ていただくこと。各県立学校のホームページの形式は同じになっており、また、今はコンテンツも充実している。

・　もうひとつはやはり学校説明会に参加いただくこと。各学校に直接話を聞くのが一番特色を知れることだと思う。

・　その他、YouTubeやSNSでも情報発信を行っている。

（久保田 氏）

・　本校の例になるが、学校説明会では教員の説明は短くし、大事なところは動画で確認してもらっている。その代わりに生徒発表の時間を多く設けて、生徒が普段どんなことをしているのかを伝えるようにしている。

・　その他、舞台芸術科では、中学生向けのワークショップも実施しており、学校からの公式な説明とは違う、生徒の学校への率直な感想などを聞くこともできると思う。

（會田 氏）

・　ホームページはコロナ禍で学校説明会が出来なかったときに充実させたと考えているので、是非ご覧いただければと思う。

（折笠 氏）

・　その他、文化祭などの学校行事に足を運ぶのも良いと思う。

【質問 ②】

どの学校も生徒が主体的な学びに日常から取り組んでいることがわかった。ただ、これだけの取組をするためには、先生方の生徒への関わりが大切になっていくのではないか。先生方が工夫していること、大切にしていることを教えてほしい。

（川上 氏）

・　生徒主体的というと何でもありと捉えられる場合もあるが、本校では必ず枠をつけ、その枠の中で自由に取り組んでいいという主体性にしている。

・　この枠を狭くすると主体性がなくなり、大きくしすぎると主体性が出すぎてうまくいなくなることがある、というところが難しい。

（久保田 氏）

・　１年次生に単に自由に取り組ませても学びが少なくなってしまうため、多めに教える。２年次になればわかっていることが多いため、どういう学習をすればいいのか考えさせるようにしている。

・　外部とつながることをカリキュラムの中にどういうふうに位置づけるかを意識することで、生徒への関わり方が工夫できると思う。

（會田 氏）

・　教員がどこまで関わるかは非常に難しい問題だが、私は「できるだけ生徒文化を作ってください」と言っている。教員は異動があり、どんどん変化していくが、生徒が作った文化は受け継がれていくと伝えている。

・　教員はレールを敷いて、後は任せて、できる限り生徒同士の繋がりで代々つないでいくという文化ができ上がったらいいと思う。

【質問 ③】

先生方が取り組む中で、やはりここが難しいというところがあったら教えてほしい。

（川上 氏）

・　これらの取組は今までの教育と違う新しいことであるため、中心となっている教員だけが進んで、周りがついてきていないということがよくある。

・　そういうことが起こらないように職員全体に周知しながら徐々に進めつつ、なおかつ早い改革をしなければならないというところが運営側の教員としては大変なところである。

（久保田 氏）

・　舞台芸術という珍しい学科であるため、部活と何が違うのか、教育的な効果は、といったことを生徒、保護者、県民の皆様などに簡単に理解してもらうことはなかなか難しいと思っているが、それを恐れて様々なことを整え過ぎてしまうことも、職員に過剰な負荷をかけてしまうことにもつながると感じる。

・　ちゃんと強く筋を持って、こちらのコンセプトを理解してもらうというところに、難しいと思いながらも、取り組んでいきたい。

（會田 氏）

・　大きなテーマはやはり持続可能と自立だと考えている。そこに教員の働き方改革ということを加えて、これから先の地域連携のあり方をきちんと作っていくことが大きな課題である。

○　論議のまとめ

（常陸 氏）

・　外部の方、プロの方、地域の方といった、学校外からの刺激が生徒に非常にいい影響を与えているとの話があったが、こうなりたい、こうありたいといった前向きな刺激だけでなく、社会の困難さや課題にどう立ち向かっていくかといった刺激も含まれているというところが非常に印象的だった。

・　外部からの影響は生徒だけでなく先生方にもあり、マインドセットという話など、先生方も刺激を受けている。

・　外部からの親しみに対し、生徒も答えようとするという、相互のやりとりの中での学びも大切。

・　生徒が地域に温かく迎えられて学びを深めることで、自分たちの社会の中での役割を再認識して、自己肯定感が高まるようなところにつながる。

・　今回紹介のあったそれぞれの学校で、今後もこれらの取組に意欲的に取り組んでいく。

・　先生方自身も学びの当事者であって、開拓者であるということを強く感じた。

（折笠 氏）

・　学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」とずっと言われているが、それを踏まえてしっかりと各学校が取り組んでおり、主体的・対話的で深い学びを意識しながら教育活動を続けているということは大変すばらしいと感じた。

・　神奈川県では学習指導要領だけではなく、平成19年にかながわ教育ビジョンというものを定めて、思いやる力、たくましく生きる力、社会とかかわる力を育成するといったスローガンを掲げて取り組んでおり、学校だけでなく色々な主体が一緒になって神奈川の子どもたちの未来を考えている。

・　また、県立高校改革というと、少子化の影響でどうしても再編・統合という話になるが、神奈川県の場合は、生徒の学びと成長にとって何が必要かという視点を最優先に、すべての県立高校で改革に取り組むという目標を掲げている。各県立高校すべてで、そういったミッションを受けながら日々教育活動に尽力しているのだと思う。

○　高校生司会者の感想

・　私は舞台芸術科に所属している。授業や発表会で学んできた中で、お互いの意見を尊重し合う力や、コミュニケーション能力、目標を乗り越えていく力などが培われ、自分の成長に繋がった。今日知った他の高校の取組も、どのような進路を選んだとしても必ず役に立つような経験が積める内容だと感じた。

・　今回の司会をしなければ知らないままだった他校の取組を知ることが出来てよかった。今後、別の高校の生徒同士で、お互いの授業について交流できるような機会ができることに期待したいと思った。

▲司会：
県立神奈川総合高等学校
岡村さん、内田さん

(4) 閉会（かながわ人づくり推進ネットワーク　幹事長　髙木まさき）

閉会のことばとして、会場・オンラインともに多くの方に参加いただいたことに対する謝辞、自らの経験や知見に基づいたわかりやすい話をいただいた登壇者及びスムーズに論議を進行いただいたコーディネーターへの謝辞、全体を通して、社会の多様性・教育力の深さを感じ、学校外の皆様と協働していくことが重要との話があった。

また、かながわ教育ビジョンに掲げた理念の実現に向け、かながわ人づくり推進ネットワークと県教育委員会とが車の両輪となって、この人づくりコラボの場を活用しながら、県民の皆様との共感、協働、連携を確かなものとしていきたいとの話があった。